堅靭美しい漁家の舵取り—雲林口湖楊梅櫻の物語

謝玉玲教授
国立台湾海洋大学

風のない熱帯の午後、五月の初夏、車は口湖の漁場の近くを走る。陽光が水面に反射し、輝いている。目の前に広がる美しい景色を前に、周囲を見渡すと、広大な文蛤の養殖池に囲まれている。特に目立つ建物は見当たらない。どの道を進んだら目的地に着くのだろうか？分からない道路標識、ナビゲーションも役に立たず、何度も道を通り過ぎながらも、まだ少し不安な気持ちがある。漁村はとても静かで、人も車も少なく、数匹の犬がのんびりと歩いている。漁村に対する理解と認識は、計画を実行して何年も経った今では明確だ。漁港、漁民、漁業に関する知識や技術、そして地域の生活経験が密接に結びついていることに気づく。書物で学んだ理論が現実の漁業現場に入り込むと、漁民の経験がそのまま、プロフェッショナルな技術の華やかな披露へと変わる。

漁業の活動を話すとき、最初に思い浮かぶのは、漁民、男性、力強さ、そしてその中で交わる労働の姿だ。台湾の西部、雲林県にある口湖郷の南端にある町に足を踏み入れると、狭い道の両側には年配の女性や子供が蚵仔（カキ）を掘っており、その近くにはたくさんの蚵殻が積まれている光景が見られる。大学の社会責任実践計画（USR 計画）の実施中、ほとんどのチームが地域人口の高齢化、若者の流出、産業の労働力不足といった問題に直面していた。偶然の縁で、楊梅櫻さんに出会い、私たちは台湾西部の漁村に対する新たな視点を得ることができた。

山から海へ、都市から漁村へ

「阿英、ちょっと待ってて。海大の先生たちにアンケート書いてもらうから、温かいお茶でも一緒に飲みに来て…」「李先生、ちょっと暇ですか？先生たちが来たので、こちらにどうぞ…」海水の逆流や浸水に備えて高く作られた大きな家に足を踏み入れると、少し痩せた女性が電話をかけ、空いている姉妹や近所の友達にお茶に来るように声をかけている。アンケートの記入だけでなく、チームで事前に約束した利害関係者へのインタビューも行われる予定だ。優雅で温かく、話好きな楊梅櫻さんは私たちに「楊姐（ヤンジエ）」と呼ぶように言った。台湾海洋大学の雲林四口 USR 計画チームと国科会の口湖地域の研究チームの教員や学生スタッフは、漁村に初めて訪れる際、楊姐に多大な助けを受けた。楊姐は 1970 年、雲林県水林郷に生まれ、水林郷は口

湖郷に隣接し、地元の特産品はサツマイモ、ピーナッツ、ニンニクなどだ。「子供の頃、ここに海があることを全く知らなかった」と楊姐は語る。中学卒業後、三重商業工業に進学し、世界を見てみたいと思っていた。結婚前には、代理インポートのアパレル会社で、Calvin Klein や STEFANEL などのブランドを扱い、主に当時の有名な芸能人にも服を販売していました、売上は常に第一位を記録していた。

22 歳で結婚し、口湖郷に嫁いだ。「最初は本当に驚いたんです。この村には海岸線がないと思っていたんですけど、後で徐々に発展していきました。」母親は台北に行って結婚することを望んでいたが、楊姐は笑いながらこう言った。「仕方ないですね、すべては縁です。私は早く結婚しました、22 歳、夫は 24 歳。中秋節に帰省したとき、道端に立っていたところ、夫が私を見かけ、翌日には追いかけてきました。」

漁家の伝統と誇り

許家(楊姐の夫の家族)は最盛期に 10 隻以上の漁船を所有し、義父と夫、そして 2 人の息子は全員漁業を生業としていた。彼らは資金があると新しい船を買い、作っていた。楊姐はその話をするたびに目を輝かせ、特に義父に対する尊敬の念を強く語った。「義父は柯俊雄に似て、とてもハンサムで、ユーモアのある話し方をしていました。身長は 180 センチ、非常に大きな体をしていました。夫と義父は魚を捕まえるのが得意で、特に義父は魚がどこにいるか、魚群が集まる場所を知っていました。」

漁業は技術であり、知識と経験の積み重ねであり、海の精密な観察力でもある。漁師は気象を読み、風が吹くと、今日の白鯧（白チョウ）は少ないだろうと直感的に察知する。捕鰻（ウナギ）に関しても、過去と異なる南下ルートを見極め、気象情報を読み取って最適なタイミングで漁を行う。

漁業における女性の力

楊姐は結婚後、漁業を手伝い、自らの事業として今日まで続けている。漁業は非常に多岐にわたる作業であり、一回の出航の前後には準備と計画が不可欠だ。家族の男性メンバーは海での仕事に全力を注ぎ、出航すれば一日中その仕事に取り組む。漁船には船長をはじめ、数人の労働者が手伝っている。船の出航前にはガソリン、漁網、箱、バスケットなどを準備し、帰港後には魚の仕分けや注文処理などが行われる。女性メンバーやスタッフがそのすべてを担っている。

楊姐は言う。「私がすべてを覚えなければならないんです。彼は 4、5 人の外国人労働者を連れて出航するので、魚の量が戻ってくると、私はどのサイズが高級で、どれがどの注文かを覚えなければなりません。漁獲を急いで整理し、毎日が時間との戦いです。」

漁村の未来と変革

楊姐は漁業の将来に不安を感じ、家庭のために養殖業にも着手した。「海の漁業はすでに厳しい状況にあるので、養殖業で補う必要があると感じています。」彼女は地域産品をパッケージ化し、ブランドとして育てることで、漁村の発展に繋げようと考えている。文蛤（ハマグリ）を主力商品として、新たな商業・文化産業として発展させることが、地域の未来にとって重要だと考えている。

「口湖の文蛤は一年中安定して供給できるので、これを主力商品にするのが最適だと思います。」彼女はこう語り、地域の特色を生かし、地元経済の活性化を目指している。

楊姐は、漁村の変革に向けて少しずつでも進めることが大切だと考えており、彼女の情熱と努力は、漁村の未来に希望をもたらすだろう。